戦後在日朝鮮人のメディア活動とその展開について*
－朝鮮文化教育会と「文教新聞」を中心に－

嚴基權**
d-cometrue@hanmail.net
李京珪***
lk5120@deu.ac.kr

<目次>

1. はじめに
2. 朝鮮文化教育会と「文教新聞」の創刊
3. 崔鮮の教育観と「文教新聞」の論調
4. 「文教新聞」の掲載記事と執筆陣
5. まとめ

主題語: 文教新聞(the Bunkyo Shimbun)、在日朝鮮人(Zainichi Koreans)、メディア(media)、朝鮮文化教育会(the Association of Chosun Culture and Education)、崔鮮(Choi Sun)

1. はじめに

戦後日本では在日朝鮮人による数多くの新聞や雑誌が創刊され、また廃刊となるなど、在日朝鮮人たちの活発なメディア活動が見られた。しかし、戦後における在日朝鮮人のメディア活動に関する研究はこれまで十分に行われてきたとは言えない。その主な理由としては、一次資料の散逸による資料入手の困難さや一次資料の経年による資料判読の難しさなどをあげることができる。こうした中、日韓ともに2000年代になってようやく戦後に在日朝鮮人が発行した新聞や雑誌などに関する研究が注目を集めて、研究が現在まで続いている。

解放を日本で迎えた在日朝鮮人たちは、帰国の準備や同胞の救済などを目的に活動する団体を数多く創立した。その中でも「親日派右派」を除いた左派中心の団体である「在日本朝

* 이 논문은 2016년 정부(교육부)의 재원으로 한국연구재단의 지원을 받아 수행된 연구임(NRF-2016 S1A5B4914839)
** 韓南大学校 日語日文学科 講師
*** 東義大学校 日本語学科 教授、交信著者

鮮人連盟」(以下、「朝連」と略す)と、「朝鮮建国促進青年同盟」(以下、「建青」と略す)と「新朝鮮建国同盟」(以下、「建同」と略す)を統合した形で創立された「在日本朝鮮居留民団」(以下、「民団」と略す)が中心となって、各団体の多様なメディアを通して在日朝鮮人の生活権などが主張されたのだった。

本研究では戦後に在日朝鮮人によって創刊された新聞・雑誌メディアの中でも、1947年9月15日に崔鮮を会長とする朝鮮文化教育会の機関紙として創刊された「文教新聞」について光を当てる。1949年4月11日に第57号まで発行された「文教新聞」に掲載された記事をデータベース化するとともに、創刊の背景と展開を探りながら、当時のメディア空間の中で在日朝鮮人が行ったメディア活動の一断面を描いてみたい。

2. 朝鮮文化教育会と「文教新聞」の創刊

「文教新聞」に関する研究については、宮本正明が「文教新聞」収録の『在日朝鮮人関係資料集成〈戦後編〉第8巻』1)の「解題」で「文教新聞」について簡単な紹介をし、近年では宋恵媛が「韓国系団体の異端児」2)として朝鮮文化教育会を紹介しながら、さらに具体的にその機関紙「文教新聞」について簡単な言及を行っている。本稿では前述した先行研究で紹介されている「文教新聞」に関する出版情報を再確認しながら、「文教新聞」の紙面を追い、さらに具体的に「文教新聞」の詳細について迫りたい。

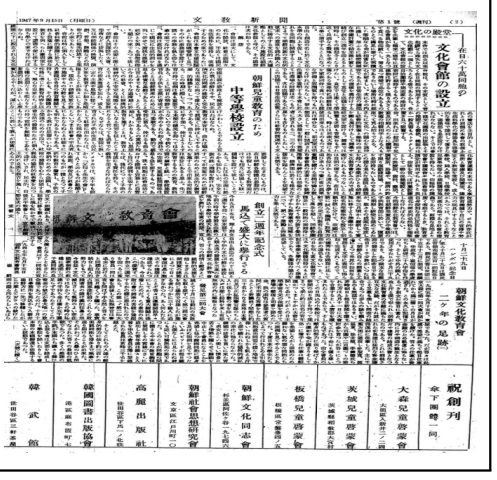
「文教新聞」は1945年9月15日に創立された朝鮮文化教育会の機関紙として、1947年9月15日に第1号が発行されている。朝鮮文化教育会が創立されてからちょうど2年後にその機関紙が発行されたのである。1945年9月15日に東京の大森にある馬込の小学校で、金斗元を主唱者にして第一回大会が開かれた。その大会の5日前の「朝日新聞」には、「朝鮮文化的教育指導員募集」というタイトルで、次のような広告が掲載されている。

> 朝鮮青年諸君ヨ熱血ノ日ハ来タ　新朝鮮建国第一歩ノ出発ガ始ツタ　朝鮮文化発達ニ邁進スル我々熱血ノ青年ヨ　日本建設ト共ニ朝鮮文化指導ニ邁進スル覚悟ハ今日デアル　日本精神教育受ケタル諸君ヨ大和魂ヲ持ツテ朝鮮文化指導者ニ希望スル熱血ノ諸子ハ左記ノ住所マデ来タレ　東京都大森区馬込町東二丁目九五五番地(道順臼田坂上上リ直グ、省線大森駅下車)金斗元参集期

1) 朴慶植編(2001)『在日朝鮮人関係資料集成 戦後編』第8巻、不二出版
2) 宋恵媛(2014)『「在日朝鮮人文学史」のために』岩波書店、p.225

日　昭和二十年九月十一日ヨリ七日マデ来ルコト3)

このように宣伝された第一回大会には約三百名の青年たちが会場に駆けつけた。一時期、会員数は三千人を超えたが、常に資金難を抱えながら引揚同胞の援護活動を続けた。同年12月16日には臨時総会が開催され、戦時中の経歴などのため、結局、会長が辞任することとなり、崔鮮が新会長に就任した。その後、本国に特派員を送ったり、1910年の併合以降に日本によって奪取された古美術品の調査及び目録を作成したりといった活動が進められてきた。1947年2月1日には、建青の要請により、会長の崔鮮が建青の文化部長に就任すると同時に同会の会員13名が建青に席を移した。しかし、崔鮮は他の幹部たちとの文化理念の違いや、財政的無援助がないことなどの理由から建青を後にし、朝鮮文化教育会に戻り、7月31日には建青との関係を断つことになる。改めて組織を整えた朝鮮文化教育会は7月4日に、池袋西口に新事務所を設置し、5日の第一回輿論調査、17日の在日朝鮮文化団体連合会脱退、8月15日の文化懇談会の開催、そして、9月15日の中央機関紙の「文教新聞」発刊に至ったのである。

「文教新聞」第1号1面	「文教新聞」第1号2面
	

<図1>「文教新聞」創刊号1面と2面

3)「朝日新聞」1945年9月10日付2面

このような経緯を経て発行され始めた「文教新聞」の発行兼編集人は社長の崔鮮が担当することとなり、定価二円の毎週月曜日に刊行される週刊の新聞であった。紙面は全4面で、1面には主に崔鮮が「主張」などの記事を書き、2面と3面には国内外の情勢を知らせる内容で埋められた。4面には文化欄が設けられ、朝鮮の文化に関する記事や長編小説、随筆、詩などが掲載された。1947年9月15日付の「文教新聞」第1号の紙面には、前年結成された建同の団長である朴烈の「祖国愛と国際観念」を始め、崔鮮の「創刊之辞」などが掲載されている。「創刊之辞」で崔鮮は「文教新聞」について「創造と真理の朝鮮文化を樹立して、文化国家朝鮮を建設」することを主張しながら、朝鮮文化教育会が「常に如何なる既成政治理念にも政治運動にも偏重しない」とし、機関紙の文教新聞も「如何なる主義主張に固執」しないと新聞の性格を強調している。また、1面には新聞の創刊を祝う新聞社として「国際タイムス」、「朝鮮新聞社」、「貿易新聞社」、「朝鮮情報社」の名前が見受けられる。2面には朝鮮文化教育会の傘下団体の名前が記されており、「大森児童啓蒙会」、「茨城児童啓蒙会」、「板橋児童啓蒙会」、「朝鮮文化同志会」、「朝鮮社会思想研究会」、「高麗出版社」、「韓国図書出版協会」、「韓武館」がそれである。3面には朝鮮文化教育会の「大森支部」、「保谷支部」、「龍ヶ崎支部」、「小笠支部」など四つの支部の名前が掲載されており、文教新聞創刊時の朝鮮文化教育会の規模を垣間見ることができる。

3. 崔鮮の教育観と『文教新聞』の論調

「文教新聞」について小林聡明は「CCDにより民族主義的であり、反ソ、反共、反米的な傾向を持つ新聞と見なされていた」と述べている。[4]また、宮本も前述した「解題」[5]の中で「反共・反朝鮮の姿勢がうかがえるが、他方で南北協商を支持する論調もみられる」と解説しているなど「文教新聞」は「反ソ、反共、反米」の性格をもつ新聞として見られてきた。このような「文教新聞」の性格は「文教新聞」の社長で、主筆でもあった崔鮮に対するのちの評価とも相通ずるものがある。元文教新聞社の社員であった朴慶植編の『背理への反抗』は生前に崔鮮が書いた文章などを集めたもので、その中の「崔鮮略歴」では崔鮮について次のように書いてある。

---

4) 小林聡明(2007)『在日朝鮮人のメディア空間』風響社
5) 前掲書 注1)、p.3

六〇年の学生革命後復権、在日韓国、朝鮮の文化人を総網羅した「祖国平和統一南北文化交流促進在日文化人会議」を主宰して統一運動史に歴史的役割を果す。六一年朴政権により除名。反共産、反軍政、南北交流の健筆をふるい、南北統一海外民族会議を主唱[6]

崔鮮没後に出版された崔鮮の文集の中でも、これは文教新聞社長であった崔鮮について「反共産、反軍政」と評価を下したものである。しかし、崔鮮に対する上記の評価が「文教新聞」の評価にもそのまま重ねるあまり、「文教新聞」に対して「反ソ、反共、反米」というレッテルを貼りすぎたのではないだろうか。そのため「文教新聞」というメディアの中にある多様な記事や執筆者の声は忘れ去られているのではないだろうか。

「文教新聞」に掲載されている具体的な記事を見る前に、崔鮮が「文教新聞」に書いた文章を見てみよう。1947年10月6日付の「文教新聞」第4号では、「先づ人間をつくれ　教育こそ祖国建設の支柱」という記事で、戦後のアメリカとソ連が牽引している状況下で朝鮮のような「弱小国家民族の生きる道が武力でなく教養でなければならない」としながら、「民族文化」の重要性を強調している。その際の教育の姿勢は「偏見的思想教育を詰め込むよりも人間本来のヒューマニテイからの出発こそ最も望ましい、又当面の目標でなければならない」と述べている。翌年の「文教新聞」第22号[7]における「主張　在日団体統合の秋」でも崔鮮は朝連と民団の対立を非難しながら「われわれが要望しているのは主義主張を止揚した無条件団結でありわれわれの権威と利益を擁護してくれる強力な一元的組織体の出現である」と主張し、在日朝鮮人が分裂されている現況を指摘し、「一元的組織体」の必要性を披瀝しているのである。

さらに、日本政府によって朝鮮学校閉鎖令が出された時にも、朝鮮文化教育会を「在日唯一の純文化団体」であると位置づけながら、「教育はイデオロギーで動く政治団体にゆだねてはならな」く、「在日同胞子弟の教育は、朝連、民団、或いは建青そういつた団体から全く切り離してなされねばな」らないと自分の教育観を改めて主張している。[8]このような崔鮮の教育観は「文教新聞」が休刊になる1949年の1月の「年頭の辞」においても再確認できる。

大韓民国政府を支持しなくてはならないという一派がある。共産主義国家こそ目標であると考えている一団もある。真実をそれらの中間に求めようとする人達もある。主義や思想である以

6) 朴慶植編(1968)「崔鮮略歴」『背理への反抗』新興書房
7) 「主張 在日団体統合の秋」「文教新聞」第22号、1948年2月9日付、1面
8) 「朝鮮人学校問題 教育を政治団体から切り離せ 文教崔鮮会長記者団に語る」「文教新聞」第32号、1948年5月3日付、2面

上、論議は自由であるが、しかし我々に与えられた命題は右翼とか左翼とか中間とかいうことでなくて完全解放であり、完全独立であり、完全なる自主自立体制の実現である。9)

このように文教新聞社の社長であった崔鮮は、解放後の朝鮮の民族教育の重要性を強調しながら、「祖国の繁栄」と「同胞の幸福」を第一の目標と掲げた「文教新聞」を創刊したのである。武力より教養、教育が強調され、「偏見的思想教育」より「人間本来のヒューマニテイ」を教育の方針にした。また、その際の民族教育は左派、右派、または中間といった偏った姿勢ではなく、「強力な一元的組織体」による「完全解放」、「完全独立」、「自主自立体制」の実現を目指したのである。

4.「文教新聞」の掲載記事と執筆陣

改めて「文教新聞」の紙面構成を確認してみると、「文教新聞」の紙面は全部で4面構成となっており、1面には主に社長の崔鮮が書いた文章を含め、「主張」、「風見鶏」といった社説と一コマの時事漫画が掲載されている。2面には教育や、教育に関する現況、または韓半島の政治状況といった国内外の情報に関する記事が掲載されている。「文化」を主に載せている3面は朝鮮の歴史、文学だけではなく、世界各国の教育に関する記事とともに日本文学に関する記事も頻繁に掲載されている。また朝鮮人作家と画家による連載小説やコントもほぼ毎回のように紙面を飾っていることが確認できる。創刊号から、休刊になる1949年4月11日の第57号まで執筆者の名前がある記事だけをまとめて見ると<表1>のようになる。その中の主な執筆陣については以下のようになっている。

- 政治及び教育：朴佳秋(社員)、林竹松、山虎人、宗諒、金仁洙(在日朝鮮居留民団豊島支部団長)、尹快快、崔勲、朴峻(社員)、金昌煥(東大学生)赤神良譲(政治学博士)、李春逢(東京在住の会社員)
- 文学：洪満基、明華春、鄭義禎、金昌奎(社員)
- 文化及びその他：金永佑、鄭達鉉、崔鮮(社員)、池島重信、大島氏(マラソン選手)、蔡洙仁(朝鮮体育協会会長)、曹廷漢、李順子、朴慶植(社員)、土田守長(医学博士)

9)「物質革命とならんで精神命を!」「文教新聞」第54号、1949年1月3日付、1面

社長の崔鮮が山虎人というペンネームで「主張」などの政治及び教育に関する記事を主に担当している一方で、前述した崔鮮の没後の文集を編集することになった朴慶植は、朴佳秋や朴峻というペンネームで政治や教育だけではなく、文化面の記事も担当していた。朴慶植は「文教新聞」に携わっていた当時を次のように回想している。

> 当時、短期間、文化部長をしていた崔鮮が辞職して「朝鮮文化教育会」を組織し、私への誘いもあったので、同年九月ごろから同会の機関紙『文教新聞』の発行に協力することになった。この朝鮮文化教育会は文化団体で、会長崔鮮の独裁的性格が強く反映されていた。ここで私は曹廷漢、金哲洙、鄭義禎、金昌奎(金一勉)らと知り合い、また洪万基も加わって、政治問題、思想、文化などについてみんなでけんけんごうごうと論じ合った。とくに崔鮮と私は口角泡を飛ばして論じ合った。崔鮮はのち民団の幹部、朝鮮奨学会の理事として活躍した。彼は民族主義者として後年統一運動に情熱をもやしたが、四十九歳の若さで死んだ。[10]

上記の回想から改めて崔鮮に対する朴慶植の評価とともに、「文化新聞」発行当時の様子を垣間見ることができる。

政治と教育に関する記事以外にも、当時、早稲田大学文学部の学生で「民主新聞」にもK・F秋・□□なるペンネームで文芸評論を寄せていた金胤奎と李順子との間で起こった「個性」をめぐる論争も目立っている。[11]また、文学の面では、戦前に朝鮮から日本へと密航し、日本で苦労をすることになる兄弟の生活を描いた洪萬基作の「流れ星」も注目に値する。1948年3月22日に掲載された「流れ星」第22回の連載を最後に、同月29日には作者の「「流れ星」中断に際して」という次のような文章が掲載されている。

> この作品は始め「密航」という極く短いものを書いたのですが新聞社側のすゝめに応じてそのまゝつぎ合せて見ました。けれども日本語に自信が持てず一向気の進まない作品だつたのです……。いづれにしても豆腐のぶつ切れは面白くなく、不可ないのですが、腰弁で苦学の身分とあればふさぎの蟲がなかなかいうことをきゝません。(後略)

洪萬基が最初、「文化新聞」に投稿しようとしていたのは「密航」という短編小説であったが、文教新聞社からの勧めで、日本語で長編小説を書くことになったと述懐している。この作品が中断されると急遽、童話「フランダースの犬」が連載されることになっている。

---

10) 朴慶植(1981)『在日朝鮮人−私の青春』三一書房、p.84
11) 「□」は文字がつぶれて判読できない字を指す。

<表1>「文化新聞」掲載記事目録

号数	日付	紙面番号	記事題目	執筆者
第1号	1947年9月15日	1面	祖国愛と国際観念	朴烈
		1面	吾らに平和と幸福をもたらす文化運動	会長 崔鮮
		4面	文化 民族抗争と文学運動	林和
第2号	1947年9月22日	1面	朝鮮文化国の樹立	金景軾
		3面	連載小説 流れ星(1)	洪萬基 作 明華春 画
		4面	文化 朝鮮演劇の危機	金克愼
		4面	詩 抒情詩人	金慶植
第3号	1947年9月29日	1面	社会革命を断行せよ 自己批判を徹底せよ	朴佳秋
		3面	長編小説 流れ星(2)	洪萬基 作 明華春 画
		4面	詩 空を見よ	鄭義禎
		4面	随想 秋	金永佑
		4面	随想 自己を悟れ	鄭達鉉
		4面	随想 小さな努力	崔鮮
第4号	1947年10月6日	1面	先づ人間をつくれ 教育こそ祖国建設の支柱	崔鮮
		4面	文化 朝鮮古代の音楽	朴佳秋
		4面	長編小説 流れ星(3)	洪萬基 作 明華春 画
第5号	1947年10月13日	4面	長編小説 流れ星(4)	洪萬基 作 明華春 画
第6号	1947年10月20日	1面	青年の指導を誤るな 文化運動層に提言す	林竹松
		3面	長編小説 流れ星(5)	洪萬基 作 明華春 画
第7号	1947年10月22日	1面	民族幽久発展のために叡智を注げ　開天節の所感	山虎人
		4面	日本における高勾麗族の分布	朴佳秋
		4面	小説 流れ星(6)	洪萬基 作 明華春 画
第8号	1947年10月25日	1面	文化建設の諸問題　民主文化創建を目指して	崔鮮
		3面	啓蒙家の必要	池島重信
		4面	小説 流れ星(7)	洪萬基 作 明華春 画
第9号	1947年11月10日	1面	在日学生諸君! 中国の学生運動に続け	朴佳秋
		4面	文化 文学の対象と表現	金昌奎
		4面	小説 流れ星(8)	洪萬基 作 明華春 画
第10号	1947年11月17日	3面	マラソンの三選手を語る	大島　氏
		4面	体育と学生	蔡洙仁
		4面	小説 流れ星(9)	洪萬基 作 明華春 画

第11号	1947年11月24日	1面	本末の顛倒を切にいましめよ	宋諒
		4面	文化 随筆　その路	金昌奎
		4面	小説 流れ星(10)	洪萬基 作 明華春 画
第12号	1947年12月1日	1面	教育に対する認識を深めよ	在日朝鮮居留民団 豊島支部団長　金仁洙
		4面	小説 流れ星(11)	洪萬基 作 明華春 画
第13号	1947年12月8日	1面	米・ソの同時撤兵と我等の態度	尹快炳
		4面	小説 流れ星(11)	洪萬基 作 明華春 画
第14号	1947年12月15日	1面	ぢつくり物事を考へて悪いところは直していきませう	山虎人
		4面	小説 流れ星(13)	洪萬基 作 明華春 画
第15号	1947年12月22日	1面	朝鮮と体育の問題について	朝鮮体育協会 会長　蔡洙仁
		4面	文化 随筆　一つの動機	金昌奎
		4面	小説 流れ星(14)	洪萬基 作 明華春 画
第16号	1947年12月29日	1面	一年を省みて	会長　崔鮮
		1面	紫煙抄 随想 “ざんげ”	山虎人
		4面	小説 流れ星(15)	洪萬基 作 明華春 画
第17号	1948年1月5日	1面	新年を凝して	金昌奎
		2面	民族反省の史的考察 汝自身を知れ	林竹松
		3面	年頭所感	尹快炳
		3面	本年も又思う	曹廷漢
		3面	紫煙抄 省みて	鄭義禎
		3面	折にふれて	李順子
		3面	年頭所感	朴慶植
第18号	1948年1月12日	1面	国際連合と朝鮮独立問題	崔勲
		4面	随筆 空席	宗諒
		4面	僕の恋	金海流
		4面	小説 流れ星(15)	洪萬基 作 明華春 画
第19号	1948年1月19日	1面	祖国独立の障害となる利己主義の根絶に努めませう	朴峻
		4面	随想 鼠(上)	金昌奎
		4面	小説 流れ星(17)	洪萬基 作 明華春 画

第20号	1948年1月26日	1面	嫉妬こそ最大の悪	山虎人
		2面	在日朝鮮学生同盟 今後の在り方について	金昌奎
		4面	随想 鼠(中)	金昌奎
		4面	小説 流れ星(17)	洪萬基 作 明華春 画
第21号	1948年2月2日	4面	随想 ガンジーと私	崔鮮
		4面	小説 流れ星(18)	洪萬基 作 明華春 画
第22号	1948年2月9日	1面	権威もつて素志を貫け	崔鮮
		4面	随想 鼠(下)	金昌奎
		4面	小説 流れ星(18)	洪萬基 作 明華春 画
第23号	1948年2月16日	1面	独立への新方途も前提は米ソ両軍の撤退	朴峻
		4面	紫煙抄 随想 龍膽花(上)	石川迪夫
		4面	小説 流れ星(20)	洪萬基 作 明華春 画
第24号	1948年3月1日	1面	朝鮮民族と3･1運動	朴峻
		4面	吾々の運命を吾々の手で切拓け	崔鮮
		4面	三･一革命の烈士に続け	金哲洙
		4面	三･一運動とフユーマニズム(上)	鄭達鉉
		4面	三･一革命運動と我等の任務	尹快炳
		4面	三･一革命を迎えて	鄭義禎
第25号	1948年3月8日	1面	大同団結して国難を打開せよ	尹快炳
		2面	教育の厳正を望むや切	李春逢
		4面	三･一運動とフユーマニズム(下)	鄭達鉉
		4面	紫煙抄 随想 龍膽花(下)	石川迪夫
		4面	小説 流れ星(21)	洪萬基 作 明華春 画
第26号	1948年3月15日	1面	朝鮮は一つなり	崔鮮
		3面	「個性」を知ろう	李順子
		4面	紫煙抄 随筆「茶碗」	田村アツ
		4面	宴	張鐘錫
		4面	小説 流れ星(22)	洪萬基 作 明華春 画
第27号	1948年3月22日	1面	惰性を清算し生活に設計図を	金仁洙
		2面	アメリカの働く女性	田村アツ
		4面	失意	張鐘錫
		4面	小説 流れ星(22)	洪萬基 作 明華春 画
第28号	1948年3月29日	1面	デモクラシーの骨子-本会の研究講座速記録より-(上)	政治学博士 赤神良譲
		4面	海棠	金億
		4面	「流れ星」中断に際して	洪萬基

第29号	1948年4月5日	1面	デモクラシーの骨子とは-本会の研究講座速記録より-(下)	政治学博士 赤神良譲
		3面	日本国民に寄す	朴烈
		3面	精神犯罪者の話	医学博士 土田守長
		4面	紫煙抄「エツセイ」哲学の領域	夫太昌
		4面	森の細道	洪万基
第30号	1948年4月12・19日	1面	朝鮮の文庫について	朴太石
		3面	「個性を知ろう」の封建性…李順子氏に…	金胤奎
		3面	女性の新しき生態=金胤奎氏の反発に答えて=	李順子
		4面	コント「朝鮮語をしやべる女」	洪昶完
		4面	私	金順愛
第31号	1948年4月26日	1面	人間の心の中に平和の城塞を築け	崔鮮
		2面	第五回臨時総会を省みて　会員諸氏に苦言を呈す	山虎人
		3面	日政の同胞子弟教育問題干渉は「不完全な法律」が根拠だ	曹廷漢
		4面	地下道の夜	山虎人
第32号	1948年5月3日	1面	「政治と哲学」	赤神良譲
		3面	アイケル・バーカー中将の声明に答う朝鮮人を与太者扱いは以ての外	崔鮮
		4面	春の巻(1) 田舎の道を歩む	画と文　洪亀城
		4面	映画随想 デユヴイヴイエと『旅路の果て』	張鐘錫
		4面	〔童謡〕子雀	鄭義禎
第33号	1948年5月10・17日	1面	学校問題闘争を通じて	山虎人
		2面	婦人の声 時間の合理化	李順子
		4面	コント 或る青年の反省	林栄一
		4面	小鳥	洪最義
第34号	1948年5月24日	1面	社会主義とヘーゲル弁証論(上)	赤神良譲
		4面	コント 薄のろ	金昌奎
		4面	個性	金起林
第35号	1948年5月31日	1面	社会主義とヘーゲル弁証論(下)	赤神良譲
		2面	朝鮮人学校問題に関し自主性を欠く日本同胞に	佐山彰子
		3面	マルクス主義批判(1)	成常煥
		4面	コント 可愛い嘘付き	鄭達鉉
		4面	詩　禁断の現実	張鐘錫
第36号	1948年6月7日	3面	「記憶すべき二つの日」伊太利と朝鮮国民のために	ウオルター・ブラツグ
		3面	マルクス主義批判(二)	成常煥
		4面	創作『ひるのひとゝき』	洪昶完
		4面	自画像	張鐘錫

第37号	1948年6月21日	2面	マルクス主義批判(三)	成常煥
		4面	創作 真実の巨火	洪萬基
第38号	1948年6月28日	3面	マルクス主義批判(四)	成常煥
		4面	人生航路	木版画　金無 文　怪童
第39・40 合併号	1948年7月12日	なし	なし	なし
第41号	1948年7月19日	2面	オリムピツク雑記　其の歴史や吾が選手団のことども	在日朝鮮体育会会長 蔡洙仁
		3面	マルクス主義批判(五)	成常煥
第42号	1948年7月26日	2面	マルクス主義批判(六)	成常煥
第43号	1948年7月26日	3面	朝鮮歴史学の再出発	朴慶植
		3面	マルクス主義批判(七)	成常煥
		4面	文化　人間としての小説家-太宰治の死について	張鐘錫
		4面	鹿	盧天命
第44号	1948年8月15日	1面	今こそ民族総反省の秋	朝鮮文化教育会会長 崔鮮
		4面	記念日に憶う	崔淑子
第45号	1948年8月23・30日	3面	朝鮮歴史学の再出発(下)	朴慶植
		4面	コントコンクール 微風	権祥順
		4面	春子	金奇龍
		4面	嫉妬	崔萬貴
第46号	1948年9月6日	4面	コント　せゝらぎ	金和子
		4面	雲二つ会はんとして(1)	文興甲 作 明華春 画
第47号	1948年9月20日	1面	偉大なる創立精神を体し常に民衆の先頭に立て	崔鮮
		2面	救国の唯一の道は文化の育成にあり	李康勲先生
		2面	青年の希望となれ	朝鮮新聞社 林竹松氏
		2面	民族の期待に背かぬよう健闘を祈る	居留民団 李海龍氏
		2面	偉大なる事業に共に協力しよう	文連委員長 姜渭鐘氏
		4面	随想　朝鮮と日本の漢字問題	成正建
		4面	デマについて釈明	崔鮮
		4面	雲二つ会はんとして(2)	文興甲 作 明華春 画
第48号	1948年10月11日	3面	ハングル普及新しい課題	張鳳仙
		4面	新制作派 一水会展評	洪城
		4面	詩 遠砧	異河潤
		4面	雲二つ会はんとして(3)	文興甲 作 明華春 画

第49号	1948年10月25日	3面	朝鮮歴史講座(1)	朴慶植
		4面	緑の祖国	盧時春
		4面	短編　うたうカナリヤ(上)	洪吉童
第50号	1948年11月8日	3面	朝鮮歴史講座(2)	朴慶植
		4面	非力の詩	柳致環
		4面	短編　うたうカナリヤ(2)	洪吉童
第51号	1948年11月15日	3面	朝鮮歴史講座(3)	朴慶植
		4面	文化　文化失格-真に反動的非進歩的なもの-	金光洲
		4面	瓦片	趙重洽
第52号	1948年12月6日	3面	朝鮮歴史講座(4)	朴慶植
		4面	文化　エゴイストの挽歌を奏る偏狭詩人の再考を望む	T･T･生
		4面	オペラ『春香』	成正夫
		4面	秋に泣く	鄭夢滲
		4面	性文化の問題(上)	鄭世美
第53号	1948年12月27日	1面	より大きな中へ一九四八年を送る言葉	崔鮮
		1面	論評　祖国統一独立の成否は外国軍隊の撤退にかゝる	曹廷漢
		3面	朝鮮歴史講座(5)	朴慶植
		4面	文化 新しい朝鮮文学	鄭達鉉
		4面	一九四八年の挽歌	山虎人
		4面	暮	夢滲人
		4面	性文化の問題(下)	鄭世美
第54号	1949年1月3日	1面	「年頭の辞」	崔鮮
		2面	随筆 齢と人生	山虎人
		2面	文化団体統合を望む	文連委員長 姜謂鐘
		2面	古い日記帖	鄭義禎
		2面	今年こそはの言葉も今年まで	金哲洙
		4面	文化　キリスト教と私	曹廷漢
		4面	随筆「歳拜」	鄭夢滲
		4面	若人の春	張相根
第55号	1949年2月14日	1面	悲壮な頑張りも遂に空し 捲土重来して再刊を期すのみ	主筆 崔鮮
		2面	南北内戦の危機を前にして 社会民主々義民族戦線確立の要	山虎人
		4面	“我々の口はもう一つ塞がれた”　文教新聞一時休刊に際して	文教局長 鄭達鉉
第56号	1949年2月28日	1面	声明書	朝鮮文化 教育会本部
		2面	早急に解決すべき問題　日本週報誌(第一一〇～一一一号)まで	崔秉昊
		3面	対馬島の朝鮮レイ属について-己亥征東をめぐる一断面-	石湖山人

第56号	1949年2月28日	4面	随筆 無垢の美しさ	洪吉童
		4面	狂へる若者	山虎人
第57号	1949年4月11日	2面	抉るは当座の恥･抉らぬは未来の恥	事務局次長　羅日相
		3面	指導　社会民主々義の基礎(其の一)	山虎人
		4面	朝鮮文芸評論　形式と内容の問題	白鉄
		4面	“三十八度線”	洪昶完
		4面	マルクス主義批判の根本点ー本会研究講座速記録よりー	曹寧柱

5. まとめ

1947年9月15日に朝鮮文化教育会の機関紙として創刊された「文教新聞」では「祖国の繁栄」や「同胞の幸福」などを主な綱領としながら、積極的に在日朝鮮人の教育に対する発言が行われてきた。特に、社長の崔鮮は「文教新聞」の紙面を用いて、特定のイデオロギーに偏らない教育方針を主張し、政治の面でも朝連と民団を統合する「強力な一元的組織体」の創立を求めた。つまり、「文教新聞」は朝連と民団との対峙の中で、右派か左派かという二項対立的な図式では収斂されない、一つのイデオロギーに偏らずに戦後日本を生き抜こうとした在日朝鮮人の文化団体の可能性と限界を同時に見せてくれるのだ。

こうした「文教新聞」は1949年4月11日発行の第57号を最後に休刊となり、それ以来、再発行されることはなかった。同年2月28日に発行された第56号の紙面は、文教新聞社内の社員同士の金銭の横領に関する揉め事の記事と社告で埋め尽くされた。当時を振り返って、朴慶植は以下のように書いている。

> 一九四九年に入ってからも、もっていた本を売りつづけて何とか生活をつづけたが、困ったのは大学の月謝であった。月謝は五千円(一年分)という、当時としては私にとって大金であった。二、三の友人に頼んでみたが、みな困っているものばかりでどうにもならなかった。私は前年の十二月に朝鮮文化教育会とは縁を切っていたが、そこの金哲洙君や鄭義禎君たちは、会長の崔鮮と意見の対立を来たし、常勤のものが全部辞めることになり、その代償として用紙の割当券を売り払って生活費としていた。このことで崔鮮から会の財産を横領したとして騒ぎたてられたが、鄭君らはその中から私に五千円を月謝に充てるようにとだしてくれた。こうした友人たちの友情によって私は何とか大学の卒業証書はもらった。

文教新聞社の事務局長であった金哲洙と鄭義禎たちが、新聞用紙の割当券を自分たちの生活費のために売り払っていたのであった。崔鮮と新聞社側は「文教新聞」には上記の社員たちを糾弾する「声明書」を発表することとなり、経営費のため休刊を余儀なくされたのである。12)

【参考文献】

小林聡明(2007)『在日朝鮮人のメディア空間GHQ占領期における新聞発行とそのダイナミズム』風響社
崔鮮(1968)「崔鮮略歴」『背理への反抗』新興書房
宋恵媛(2014)『「在日朝鮮人文学史」のために』岩波書店、p.225
鄭栄桓(2008)「【史料と解説】東京裁判をめぐる在日朝鮮人発汗新聞・機関紙の論調：プランゲ文庫所蔵史料を中心に」日韓相互認識、pp.19-67
朴慶植(1981)『在日朝鮮人一私の青春』三一書房、p.84、pp.106-107
_____(1989)『解放後 在日朝鮮人運動史』三一書房
_____(編)(2001)『在日朝鮮人関係資料集成 戦後編』第8巻、不二出版、p.3
朴慶植・張錠寿・梁永厚・姜在彦(1989)『体験で語る解放後の在日朝鮮人運動』神戸学生・青年センター出版部
山本武利(1996)『占領期メディア分析』法政大学出版局

논문투고일 : 2017년 06월 30일
심사개시일 : 2017년 07월 17일
1차 수정일 : 2017년 08월 04일
2차 수정일 : 2017년 08월 10일
게재확정일 : 2017년 08월 17일

12) 前掲書注10)pp.106-107

<要旨>

戦後在日朝鮮人のメディア活動とその展開

－朝鮮文化教育会と「文教新聞」を中心に－

嚴基權 ·李京珪

本稿では1947年9月15日に朝鮮文化教育会の機関紙として創刊された「文教新聞」に焦点を当てた。戦後日本では在日朝鮮人たちによって数多くの新聞や雑誌などが刊行された。こうした中、「文教新聞」は「祖国の繁栄」や「同胞の幸福」などを主な綱領としながら、積極的に在日朝鮮人の教育に関する記事を掲載してきた。これまでの先行研究では、「文教新聞」とその社長の崔鮮に対して「反ソ、反共、反米」というレッテルが貼られてしまったばかりに、「文教新聞」における多様な記事や執筆陣の声が忘れ去られてきた。また、崔鮮が文教新聞に書いた記事を見ると、その内容は特定のイデオロギーに偏らない教育方針を主張し、政治の面でも朝連と民団を統合する「強力な一元的組織体」の創立を求めるものだった。つまり、文教新聞は朝連と民団が対峙する中で、右派か左派かという二項対立的図式には収斂されず、一つのイデオロギーに偏らない執筆姿勢を維持していたのである。このような「文教新聞」は創刊から約2年後の1949年4月11日に、第57号を最後に休刊となり、戦後に発行された在日朝鮮人による文化団体の機関紙の可能性と限界を同時に見せてくれるのである。

Media activity and its development by Zainichi Koreans in postwar Japan

－Focusing on the Association of Chosun Culture and Education and the Bunkyo Shimbun－

Eom, Ki-Kweon ·Lee, Gyeong-Gyu

This article focuses on the Bunkyo Shimbun, a newspaper published as an organ of the Association of Chosun Culture and Education on September 15th 1947. Zainichi Koreans in postwar Japan published many newspapers and magazines. In this situation, the Bunkyo Shimbun carried many articles on education of Zainichi Koreans in Japan, with using two slogans; “prosperity of our country” or “happiness of Korean countrymen.” In previous studies, the political stance of the Bunkyo Shimbun and its president was viewed as “anti-Soviet, anti-communism, and anti-America.” Hence, the political diversity of articles and their authors were forgotten. But the fact was that Choi Sun, a president of this newspaper, insisted on such education as not categorized into a certain ideology by using this newspaper. He asserted the necessity of “a powerful unified organization” which integrate Cho-ren(Association for Korean people in Japan)with Mindan(Korean Residents Union in Japan)politically. This newspaper insisted on a political stance, which is not reduced to one ideology based on a bilateral opposition of right/left against Cho-ren or Mindan. When the 57th volume of the Bunkyo Shimbun was published on April 11th, this newspaper discontinued after two years of its foundation. The Bunkyo Shimbun shows not only its possibility but also its limit as a cultural organization of Zainichi Koreans in post-war Japan.